

恋するウサギと錠前屋

S a k u m i e ? K a i

龍田よしの

Yoshino Tateuta

Eternity



エタニティ文庫

序

光るものに惹きつけられる。

暗く狭い場所に怯える自分を守つてくれるから。

心の扉の奥にある草原は、太陽と花でキラキラしてゐる。
そこにいるウサギたちは小さくて臆病だけど、
長い耳を揺らしながら朔美さくみを後押ししてくれる。

立ち止まるな。縮こまるな。

前へ進め。

扉は必ず、開く。

狭いところが嫌いだ。

どちらがより嫌いかと聞かれれば、暗い方。なのに。
こんなところで何してるんだろう。

「だから鍵だつてば。一体どこに行つちやつたの」

森瀬朔美が半泣きで這いつくばっているのは、町外れの通りだつた。
商店街から離れた昔ながらの住宅地は、日が暮れると暗くなり人気もなくなる。

「町内に限り」との条件付きの商品お届けサービスは好評で、常連さんも多い。年輩のお客さんは一人暮らしが多くてあれこれおしゃべりをしたがる。暗くなるのはわかつてもつい長居してしまった。急いで帰ろうと思つたらスクーターの鍵がないときている。思わず自分を蹴りたくなつた。

思い当たるのはここに着いた時のこと。

前の家でも引き留められて時間に遅れ、スクーターを停めて品物を手に急いだら、蹴つまづいて転んでしまつたあの時だ。抜いたばかりの鍵も持つていたはずなのに、品物に気を取られて落としたことに気づかなかつたなんて。

昼間なら簡単な捜し物も、日が暮れた後の暗い道では難しい。街灯は落としたと思われるところから二、三メートル先にあるが、ぼんやりと広がつた光は闇に吸い取られて役に立たない。

自分にとつては緊急事態だ。一一〇番か一一九番に助けを求めるようかと思うくらいの。辛うじて自制心はまだ残つている。昨日も夜遅く商店街を救急車が走つていた。自分よりも必要とする人がいるはずだ。

朔美にはいざという時のために必ず持ち歩く七つ道具があつた。メタルボシェットから取り出したペンライトもそのひとつで、暗くなつた時はこれが命綱。しかし捜し物となると、無いよりマシという程度の明るさだ。冬の路上に這いつくばる。人に見られたらおかしい格好も我が身となるとただ必死。

「なあ」

絶対このあたりにあるはずなのに。
どうして見つからないの。どんどん暗くなつてくる。

「何やつてんだ」

やだやだもう、お願ひ出てきて。せめて返事して。
ほんとに泣きそう。

「おいつて」

「きやあつ」

真つ暗な中で突然肩に手を置かれて、朔美は恐れおののいた。手元に灯りがあると周囲はかえって闇に沈むため、しゃがんでいる朔美からは相手の顔すらよく見えない。怖い。

胸に握りしめていたペンライトを武器のように向けて了。相手がのけぞる。

「だれ？」

「ただの通りすがりだ、ライトやめる」

手首をつかまれ、身体ごとぐいと引き上げられて腰が浮いた。握りしめたペンライトに浮かび上がった顔はイケメンだったが、恐怖の方が大きくてそれどころじゃない。

「で、何やってるんだ」

鼻先十七センチでイケメンが、じやなくて男が、いかにも疑わしそうな声で聞く。その厳しい詰問口調に怒りがわくものの、情けないほど細い声しか出ない。

「スクーターの鍵を、落として」

初めて気づいたみたいに男の視線がスクーターに落ちた。持っていたペンライトもそっちへ向けさせられる。濃い眉毛の下の鋭い目つきが、奇異なものを見るそれに変

わつた。

「スクーター？ これが？」

「他の何に見えるの」

さすがにむつとして言い返す。

「何かって言えばスクーターだろうけど。……こんなのが初めて見る。テカテカピカピカ」
そりやそりやどうでしようよ。自分でデコつたんだもの。こんなに暗くなれば自慢するのに。イケメンに自慢する機会なんてそうあるもんじやない。でも、それは今じやないし、こんな暗い場所ですることでもない。細いライトに負けじと闇がじわじわ浸食していく。
だから早く。

「離して、鍵を搜さなきや」

ゆるんだ指をふりほどいて、朔美は再び地面に貼り付いた。

ドキドキしてるのは恐怖のせいか興奮のせいか、どっちだろう。

「暗すぎる。明日にしろよ」

「スクーターを置いてなんか行けないもの」

朔美は元々持ち物が少ないからどんなものでも大切。特にスクーターは大事だ。この子を置いていくなんてできない。

お尻に何かが当たつて「ひえっ」と声が出た。おびえながら振り返ると、携帯電話を

螢のように光らせ、男が朔美の後ろでやつぱり這いつくばっていた。

「何、して、るの」

「どんな鍵だ。キー・ホルダーとかついてるよな」

驚きで言葉を見失った。捜してくれる?

「このど派手なスクーターが動くのを見たい」

こっちを向いた男がにやつと笑つた。胸がきゅっと締め付けられた理由は考えまい。

それよりも捜してもらわなきゃ。

「キラキラしたビーズのウサギが付いてるから」

「ウサギね」

くすくす笑う声は温かかった。道のあちこちで彼の頭が上がつたり下がつたり、本当に捜しているのがわかつて恐怖心が薄れる。

「自分で光ってくれりや助かるんだが」

もう一度胸が締め付けられた。光を当てなきや光らないビーズのウサギはまるで、自分みたいだと思ったから。

「そうか、それだ」

振り返つた彼にペンライトを奪い取られた。

呆然として、それから慌てふためく。

「かっ、えして」

「落ち着け。こっちの方が早い」

「返して、返してってば」

忍び寄るパニックにつかまらないためには灯りが要る、どうしても要るのに。

信用しちゃいけなかつた。イケメンだからってこんな極悪人を。

肩を抱かれた。相手はこの極悪人しかいない。喉の奥まで出かかっていた悲鳴を思わず呑み込む。涙は目の縁でたゆたっている。

「いいか、ぐるつとライトを当てるから、光るものを探すんだ」

そう言うと朔美と一緒に身体を伏せ、彼はペンライトを地面に這わせた。ゆっくりと円を描くようにライトを回していく。意味がわからぬままとりあえず彼に従つて光の先に目を凝らす。

光る、もの。

チカッと何かが見えた気がして声をあげる。

「あ?」

朔美が指さす方をもう一度ライトがなぞる。確かに何かが光っている。肩から彼の手が離れた。急に寒く感じる。

「ライトを動かさない方がいい。あそこ、見えるな」

「うん」

細い光の筋と、認めたくないけれど彼の声に励まされて、朔美は闇の中を四つん這い^ばで進んだ。それは確かに鍵だった。朔美が作ったビーズのウサギ。握りしめて胸に抱いて、今度は安堵で泣きそうになる。

いつの間にか彼がそばに立つてペンドライトを差し出していた。受け取ったそれを、彼の顔でなく胸のあたりへ向ける。できればちゃんと顔を見たかったからだが、やめとけばよかったですと思った。笑顔が花火のように心に焼き付いてしまった。

「あ、りがとう」

「見つかってよかったですな。まあ見つからなくともなんとかできただろうが」

「なんとかって」

「得意なんだ、鍵は」

彼がにやっと笑った。確信犯のような笑みだ。

「いつだって方法はあるものさ」

いたずらっぽい目つきに、彼流の冗談だと思いたかったが、気を許しかけていた朔美は自分の警戒心が呼び覚まされるのを感じた。鍵が得意ってどういう意味。この人、何者なの。

腰が引ける。相変わらず周囲は闇だし鍵も見つかっただし。そうなれば選択肢はひとつだ。

「えっと、ほんとにありがとうございます。じゃあ私、急ぐから」

「気をつけろよ」

彼は引き留めなかつた。ありがたいと思う一方で失望も感じる。氣のせいよ。

スクーターに飛び乗ると大事な鍵を差し込んで回す。ヘッドライトが明々^{あかあか}と点いてようやく、朔美の緊張がゆるんだ。振り返りたいのを必死で堪^{こら}えて発進する。

口笛が聞こえたような。ううん、気のせい。

消えていくスクーターのテールランプを、腕を組んだ男が面白そうに見送っていた。

2

帰り着いた朔美は疲れきっていた。

閉店時間に間に合わないことは連絡していたので、店はママが閉めてくれていた。表のシャッターを上げて中にデコスクを押し入れる。いつもやっていることなのに、今日は疲れているせいかひと苦労だ。再びシャッターを下ろし、引き戸の鍵をかけると深いため息をつく。緊張と興奮が神経を逆立てている。

奥の階段を上つて店の真上にある自室へたどりついたら、ダウンジャケットを脱いで

ベッドに倒れ込む力しか残っていなかつた。

何度も見てきた、同じ夢だ。

夢を見た。

山中の小さな町が朔美の故郷だ。町を二分する川はそのまま住民を二分する。一方に住むのは水と山と土地を支配する者たち。彼らは昔から裕福だ。

森瀬家は土地に根ざした一番の財産家で、代議士の家系だった。長男で跡継ぎの義父も、県会議員を務め代議士を目指しているという。彼の前妻が病死した三年後、母は朔美を連れて後妻に入つた。

森瀬の家を初めて訪れた時、朔美はまだ六つだった。物心ついてからずっと小さなアパート暮らしだつたが、朔美にとっては屋敷の広さと贅沢さよりも、父や兄姉ができることの方が重要で魅力的に思えたものだ。

けれど現実は甘くなかった。政治家として飛び回る父と顔を合わせることは滅多になかつたし、頭がよく鋭いまなざしを持つた中学生の紀彦(のりひこ)、小学生ながらに気位の高い舞、義兄姉とともに母と朔美を見る目は冷たく態度はそつけなく、朔美的期待はことごとく裏切られた。

母は元々母性あふれるといったタイプではなかつたが、森瀬の家に入つてからは新しい立場に慣れるのに必死になつて、朔美にかまう余裕がなかつたようだ。幼かつた朔美は人恋しさも手伝つて何かと義兄姉にまとわりついたけれど、犬猫のように追い払われてばかりだつた。

あの頃の自分を振り返ると、良く言えば人懐っこい、悪く言うと人に媚びる子どもだつたと思う。それまで一人でいることが多かつた分、向けられる好意には敏感すぎるほど敏感で、何もないところからもそれを探し出そうとするほど。通りすがりの微笑みひとつを一日の糧にするようなところがあつた。

アパートでは顔見知りもいたのに、森瀬の家では全く違つた。家も庭も広すぎた。ご近所は遠かつたし、昔からの地主であるせいか住民たちとは距離があるようだつた。両親は忙しく、たくさんの使用人は突然飛び込んできた朔美に丁寧に接するものの親しみは見せず、（おちか）培つてきた子どもなりの処世術は通じなかつた。

とはいえ朔美にできることは、好意のかけらを探しながら紀彦や舞にまとわりつく以外にない。本気で嫌われているとは思つていなかつた。思い当たる理由もなかつた。きつといつかは。そう信じていた。

れに合わせるかのよう^にに家にいな^いい、ほんと無視されながらも紀彦と舞に話しかける日々。学校では何人か友達もできたが、やっぱり遠巻きにひそひそ言われることが多かった。このあたりの生まれでないことや後妻に入つた母のことなど、朔美に聞かずはいつもあつた。面と向かって聞いてくれれば説明できるのに勝手なことばかり言つて、悔しかつた。噂される理由はあつたのだ。朔美が知らなかつただけで、そして事件は起こつた。

朔美が三年生になつた頃だ。中学生の姉の舞は近辺では評判の美人で、彼氏もいるらしく頻繁に出かけていた。

ある日、学校から戻ると両親が舞と口論している。義父は怒り、母は狼狽していた。
「まだ中学生のくせして色気づくんじやない！」

「色気づいてなんか」

「口答えするな！」

平手打ちが飛んで朔美は仰天した。頬を押さえた舞が唇を噛みしめて憎々しげに義父をにらむ。

「いいか、当分学校以外の外出は許さん！」

言い渡して義父はまた出かけていった。残された舞は母に食つてかかる。

「言いつけたわね」

「噂になつてるわ。中学生なら中学生らしい付き合い方が」

「よくそんなこと言えるわね。色仕掛けで病氣のお母さんからお父さんを奪つたくせに」
さつと母の顔が青ざめた。色気づくとか色仕掛けつて何のことだろ。首を傾げながら振り返ると、いつの間に帰宅したのか、高校生の紀彦が母と舞を冷静な顔で見ていて、「許さないのはこっちよ。放つといて」

「舞さん」

潤んだ目で頬を押さえ、舞は自分の部屋へと走り去つた。紀彦も無言でならう。朔美にはわけがわからなかつたが、母は説明などしてくれなかつた。

いつもより早い夕食の時間に、姉は降りてこなかつた。食後、トイレに行つた朔美は出かける格好の舞と鉢合せして驚いた。

「舞ちゃん、どこ行くの」

「うるさい」

「外に出ちやだめだつてお父さんが」

「うるさいったら」

喧嘩はいやだつた。言い合う声も誰かが叩かれるのもいやだ。

また姉が怒られないかと心配で追いかけたら、振り返ってにらみつけてくる。慣れているので怖いとは思わなかつたが、姉の表情がそこで変わつた。

笑つたのに笑つて見えない。姉に笑顔を向けられるのは初めてだが、違和感があつた。今ならわかる。口角を上げただけの作り笑いは、人を和ませるどころか怯えさせる。だが、幼い朔美はそこまで見抜けないし思い至らない。

「一緒に行く？」

「……どこへ」

「内緒のところ。おいで」

姉に手を差し出されたのも初めてのことだ。嬉しそぎて朔美に拒めるわけがなかつた。

姉の手は白くて柔らかくてドキドキする。待ち望んだ何かが始まる気がした。

夕焼けが闇に消えかけている。

舞が朔美を連れ出したのは、家の裏に並んでいる倉だった。家の周りは子どもにとって一番の遊び場所だ。朔美も遊んでいて倉に入ろうとしたことは何度もあつたが、入れなかつた。倉の戸にはどれも大きな錠前がぶら下がつていたからだ。

不思議に思いながら姉に従つて一番奥にある倉の前まで來た。舞はどこからか取り出した懐中電灯を点けるとぶら下がつている錠前を捜し当て、ぐいと引っ張つた。かちつという音とともに錠前のU字部分に隙間ができる。ひねるとあつさり錠前ははずれた。

目を丸くしている朔美を振り返つて舞が薄く笑う。

「誰も気づいてないのよね。もう何年も開けてないから」

はずした掛け金に錠前をぶら下げ、扉を開ける。懐中電灯に照らされた中は薄暗い。かびたような臭いの空気が忙しく外気と入れ替わるのを肌に感じる。わくわくした気持ちは気味の悪い怖さに取つて替わつた。

「なんでここに」

「待ち合わせにちょうどいいの。ここなら誰も来ないでしょ。ほら」

朔美はためらつたが懐中電灯を押しつけられて渋々、舞に続いた。

おそるおそるあたりを見回す。

倉は保存品や秘蔵品などをまとめてあることが多いが、ここはそうではないらしく雑然としていた。何かわからないものが手当たり次第に放り込まれ、時とともに忘れられていっている。壺やら農作業の道具やら、木枠とか木箱とか。奥の方に狭くて急な階段が見えるが、きっと二階も似たような感じだろう。

床はギシギシと鳴り、足跡がつくほどほこりが積もつて、懐中電灯の光に反射してキラキラと薄い氷の膜みたいに光る。踏み出せばそれがもわつと舞つた。汚いものが綺麗に見えるのが不思議で、もう一歩踏み出す。その時だつた。ギッと重い音に、がしゃんと割れたような音が続いて扉が閉まつた。掛け金をかける

音も聞こえる。一人、倉の中に取り残されたのが信じられなかつた。朔美は呆然として、それから扉に飛びついた。

「舞ちゃん？」

「出かけるのを邪魔するからよ」

「開けて、怖いよ」

「どうせ寝る前にあの人が気づくでしょ」

「置いてかないで、お姉ちゃん！」

「うるさいっ」

「姉の怒氣の激しさに息を呑む。」

「お姉ちゃんなんて呼ばないでよ、泥棒猫のくせに！」

「どろぼう、ねこ？」

意味がわからなくて繰り返す。

「あんたの母親は泥棒猫よ。病氣のお母さんからお父さんをかすめとつて、お母さんが死んだら平気な顔でうちに入り込んで。お父さんと血が繋がつても泥棒猫の子はやっぱり泥棒猫なんだから」

今の朔美には舞の言葉の意味が理解できない。倉の窓はずつと高い所にあって、雨よけの庇の向こうに見える空はとっくに闇だ。そこら中が闇だ。

握りしめている懐中電灯が命綱に思える。泣き声になる。

「怖いってば」

「泣けばいいわ。お母さんが死んだ時、あんたの母親とあんたのことを知った時に私がそうしたのと同じくらい、泣いてわめけばいい」

泣き出したいのは朔美のはずなのに、どうして姉の声が泣いているように聞こえるんだろう。

「あんたもあんたの母親も大嫌い。消えちやえればいいのよ！」

『大嫌い』
言い放された言葉の全ての意味がわかつたわけではないが、まず襲つてきたのは悲しみだった。母と自分の存在が舞を、おそらくは紀彦も、さらには二人の母親まで苦しめていたのだと初めて知つた。何も知らなかつたからといってその罪を免れることはでき

そくなかった。
紀彦は勉強好きの青年で静かに微笑むと優しげだった。舞はきつく見えるが、使用人には気遣いを忘れない。それらは朔美に向けられることはないけれど、いつも憧れていった。兄や姉に好きになつてもらうことはできないのか。ずっと願つていたのに。
ぽろぽろと涙が止めどなく流れた。ひとしきり泣いた後、改めて静けさと闇が押し寄

せてきて、今度は闇の恐怖に取りつかれた。

扉を叩いて助けを呼んだ。叫んだ。わめいた。でも倉は家から離れている上に、ここは一番奥の倉だ。小さな女の子の声など母屋に届くわけがなかつた。

舞が言つた通り、母は寝る前に朔美の部屋をのぞきにくるのを習慣としていた。でもこのところは忙しいし帰りも遅いから、今もそうしてくれているかどうかわからない。

布団にいなくともトイレに行つたと思うかもしれない。もし母が気づかなければ、舞が戻つてくるまでここにいることになる。それがいつになるのか。

明日？

もつと？

時間の感覚はすぐ無くなつた。何時間も経つたのか、十分二十分しか経つてないのか見当もつかない。残された懐中電灯はからうじてもらえた姉の気遣いだったのかもしないが、だんだんその光も弱くなつていく。電池が切れかけていると気づいて恐怖はさらに大きくなつた。

灯りの届かない倉の四隅から、上からも下からも闇が朔美を取り囲み、お化けや怪物の住みかになろうとしている。息を潜めてこつちを狙つている気がした。気配が、物音が、聞こえてくる気がする。

ぱんぱんの風船みたいに、朔美の恐怖は膨れるだけ膨らんだ。ちらちらと点滅し始め

た懐中電灯を握りしめて祈る。

「消えちゃいや、消えないで、お願ひ」

朔美をあざ笑うかのように懐中電灯が切れると、風船も割れた。

闇に包まれ朔美は絶叫した。

長く鋭く、果てしない悲鳴だつた。

倉の高窓から夜の空氣を裂いて、外まで響いたのかもしれない。

「つつ！」

飛び起きたらベッドの上だつた。大人になつた自分の部屋。故郷は遠い彼方だ。

心臓はばくばくして破裂しそうだし、涙で頬がひりひりする。何度も見た夢。何度も同じ夢。変わるものがない。本当にあつたことだから。忘れようにも忘れられない、朔美の過去。

どうして夢は何度も思い出させるんだろう。

見慣れた部屋は痛いくらい眩しかつた。眠つてゐる間も明々とライトを点けっぱなしの光景は、闇を怖れる朔美の心そのままだ。目覚まし時計の示す時刻は夜明けにまだ遠い、丑三つ時。

ああいや、いやだ。

朔美は布団をひつかぶつた。眠りたいわけじゃないけど、朝が来なくちゃ起きられない。
逃げるようすに朔美は目を閉じた。**生憎** 梦は過去の続きだった。

恐怖で心臓が飛び出すかと思うほど叫んだ朔美は、倉で氣を失つたらしい。

気づいた時には自分の部屋に寝かされていて、赤い目をした母と**憮然**とした義父、それから医者が自分をのぞきこんでいた。布団の足元にはこの部屋に入つたことのない紀彦の姿もあったが、舞はいなかつた。どうやつて見つけだされたのか誰も教えてはくれず、逆にどうして倉にいたのか聞いたりされることはなかつた。

一週間ほど学校を休み、何事もなかつたみたいに朔美は元の生活に戻つた。状況は落ち着いたかに見えたが、異変はその後に来た。

たとえば視聴覚室とか体育倉庫とか、暗い場所はもちろん、明るい場所が暗くなるとそこから一步も動けなくなる。恐怖に震え、顔はゆがみ、悲鳴を上げる。

家ではそこら中の電気を点けて歩き、使用人たちに呆れられた。トイレや風呂に入れず母を困らせた。車には決して乗ろうとしなくなつた。

初めはそんな朔美の様子を笑つていた舞だが、事の根深さと深刻さが明らかになるにつれ、朔美を避けるようになつた。責任を感じたのか責任を問われるのを怖れたのか。どちらでも良かった。朔美も姉を、そして兄をも避けるようになった。事件と、姉に

知らされた真実が、**朔美から人懐こさも削ぎ取つたのだ。**

味方は誰もいなかつた。同級生には奇異な目で見られ、ひそひそと噂され、以前にも増してあることないと言わされた。学校へ行くのも苦痛になつた。クラスではいつも一人、グループ分けではみそつかすで、みんなが自分を押しつけ合うのを黙つて見ていた。母に連れられていつた精神科では、倉での出来事がトラウマになつたのだろうと言われた。だが原因がわかつたからといって、治療できるとは限らないのが心の難しさだ。朔美が落ち込んだ闇は長く彼女をとらえ、解き放とうとはしなかつた。

昼も夜も灯りをつけた部屋に閉じこもつて過ごすようになつた。わずかな闇にも耐えられず、影を作る家具まで放り出した。煌々と明るい部屋は真っ白で空っぽで、そこにたつた一人。

それでも影はできる。影は自分の後ろにあつた。

無くすためには自分を消すしかない。とうとうそこまで追い詰められた。
もうおしまい。

全てに見切りをつけかけた瞬間、朔美の心にムクリと現れたのは、ウサギだった。
母と暮らしていた頃。アパートの下の階におばあさんが住んでいた。一人暮らしだが面倒見のいい人で、母が仕事を休めない日に熱を出したりすると、朔美を預かってくれた。

おばあさんはウサギを飼っていた。年寄りのペットにしては珍しかったが、白くてふわふわでやわらかで、朔美は夢中になった。^{いへよみ}一時、おばあさんとウサギが小さな朔美の世界を占めていた。

ある日、ウサギが死んだ。動かなくなつたウサギは、軽いのにやたらと重い、痛いくらい重い物体だった。抱きしめて朔美は泣いた。死を目にしたのは初めてだつたから。

泣きやまない朔美を慰めようとしたのか、おばあさんは言つた。

「悲しむことはないんだよ。シロは扉を開けただけさ」

「とびら？」

「別の世界で遊んでる」

「私も行きたい」

おばあさんは首を振つた。

「あなたは小さすぎるよ」

「大きくなないとダメなの？」

「シロがいるところは最後の扉の向こうだ」

「サイゴ」

どういう意味だろう。朔美には難しかつた。

「そこに着くまでには扉がいっぱいある。あなたが開ける扉はたくさんあるよ」

朔美の頭を撫^なでる。そつと優しく。

「悲しむことはないんだよ」

そう言つたおばあさんも、いつの間にかいなくなつた。母は悲しげな顔でお引っ越ししたのよと言うだけ。おばあさんも扉を開けて行つてしまつたんだと朔美は思つた。自分もなんとか行きたくて、階下の空っぽになつた部屋をあちこち探したけれど、別の世界への扉は見つからなかつた。

でも、シロはいる。別の世界で遊んでいる。

おばあさんの言葉を朔美は信じた。いつかそこへ行きたいと願いながらも忘れかけていた。

もうおしまい。

影に追い詰められた朔美はナイフを握つた。

明るすぎる照明が刃を閃かせ、手首のためらい傷から赤い血が滲^{じご}んだ時だ。

部屋とは対照的な、出口のない真っ暗な心に、手首の傷そつくりの細い光が漏れた。ぽんやりしながら朔美はその隙間から向こうのぞき、はつとした。

シロが、他にもたくさんのウサギたちが、明るい日差しの中、草原で跳ねている。隙間はそれ以上広がらなくて朔美はそこに入れないので。

なんだ、ずっとそこに。
居たのね。

朔美の声が聞こえたように、ウサギたちがピンと耳を立てこっちを見た。扉は開かなかった。でも朔美の中に、朔美の心にある世界が見えた。シロも朔美と共に在るなら、自分が死んだら彼らの世界も終わってしまうの？

ウサギたちの耳がそよぐ。力強く足踏みする。身体全体に響いてくる。エールのように。負けるな。

握りしめていたナイフが手から落ちた。

手の届かないウサギの代わりに、朔美は自分を抱きしめた。

彼らは朔美自身の「生きたい」という願いだったのかもしれない。叫びたいほどに切ない思い。

あの日から朔美は闘たたかい始めた。
ウサギたちと共に。

光るもののがそばにあれば落ち着くことに気づいた。すぐにパニックになる自分をコントロールする術を探した。髪を赤く染めたのも、灯りを求める自分への暗示のようなもの。いつかあの明るい草原へ行ける時まで、扉が開くまで、私自身を灯りにするんだ。私は強くなると言ひ聞かせた。

エレベーターなど日常で避けづらいものには、短い時間なら乗れるように自分なりに訓練した。毎日を生きていくだけで精一杯だったが、それでもなんとか高校を卒業した。家を出たのは、生まれ育った町自体に閉じこめられているようで苦しかったから。新しい場所が欲しかった。

まずバイトでお金を貯めた。電車や車という狭い空間に耐えられない朔美は、スクーターならと考え免許を取つた。スクーターで初めて町の道路を走つた時、目の前の景色がビュンと流れた。ハンドルを握る朔美の身体中を爽快感と解放感が満たした。

私にもできる。

一人で望む場所へと、扉を開けること。

どこかで見たようで思い出せないイケメン。
彼は鍵を差し出しながらにこりと笑つた。

『いつだって方法はあるものさ』

かちつと鍵が開く音がして、目が覚めた。

朝だつた。カーテンを開けたままの窓から差し込む一杯の日射しで、つけっぱなしの灯りもおとなしく見える。ぼんやり辺りを見回した朔美は瞬きして、両手で顔をこすつた。

あの男の顔と、声が甦る。どうして。あんなわけのわからない、怪しくて危なそうな人なのに。

でも、一緒に鍵を搜してくれた。

見つけてくれた。

あ、と気づいた。昔の夢を見たら必ず残る苦さや重さがない。

浮かんでくるのは彼のことばかり。なんの一体。

ふわふわした、温かけれど不確かな感情に朔美は戸惑つていた。

3

大福商店街はいつも賑わっている。新しい店が台頭する一方で、古い店も代替わりして新陳代謝しているところがいい。通りを行く人の数は多く、どの店もそれなりに客が入る。その中でも、込み合っている店があり、そうでない店もあり。

朔美の店は午後になつても暇だった。拭き掃除にもさすがに飽きてうーんと伸びをする。店内はおもちゃ箱をひとつくり返したようだ。初めて見た時もそうだったなと思出した。

にピーピーと口笛を吹いてたつけ。

素知らぬ顔を保っていた朔美は、ある店の前でデコスクを止めた。看板には「ジルボックス」とある。キラキラピカピカするものに引き寄せられて店内へ踏み込むと、思わず顔がほころんだ。

指輪にピアスにイヤリングにネックレス。ブレスレットに髪留めにカチューシャにピーズ。さほど高価ではないだろうが、安物っぽくないデザインのアクセサリーの他、女の子の好きそうな雑貨小物や食器、どう見ても高価そうな人形や置物まで並んでいて、わくわくしてしまう。

広くない店内を隅々まで見回していたら、レジの横にある幅の狭いガラス戸棚の中の優美な宝石箱に視線がとらわれた。

銀色の飾り彫りの施された表面に、細かな光の粒がちりばめられている。本体を支える四本の足はベルベットに包まれ、つま先は貴婦人の爪のように金色だ。吸い寄せられるようにレジ横へ近づいた朔美は、じっとガラス越しにそのキラキラピカピカに見入つて、ほうつとため息をついた。

「素敵でしょ」

突然声をかけられてぎょっと後ずさった。

レジにいた人に気づかないなんてどうかしてる。それもこんな美人に。朔美よりはる

かに年上だろうが、はつきりした目鼻立ちといいメリハリのある身体といい、羨ましいくらいのいい女、だ。

でも、今聞きたいのは。

「これっておいくらなんですか」

「ごめんね、売り物じゃないの」

「嘘」

よくよく見なくとも品物の真横に大きく「非売品」と札ふだが置いてあつた。見えなかつたなんて本当にどうかしてる。たとえ売り物でも自分に手が届く値段とは思えなかつたけれど。

すっかりしょげた朔美を見てかわいそうに思つたのか、女性は戸棚を開けると宝石箱を取り出した。

「見るだけなら」

「うわあ」

漏れたのは感嘆と憧れ。

朔美的手に載せられた宝石箱は幅二十センチ足らず、高さは足を含めて十四、五センチというところか。手触りも素敵でため息しか出でこない。

「開けてもいいですか？　あ」

尋ねたとたんに朔美の手から宝石箱は消えた。甘い物を取り上げられた子どもみたいな情けない顔になったと思う。宝石箱をガラス戸棚に戻す彼女はあくまでもにこやかだ。「物だつて人だつて聞く時は選ばなきや。そうでしょ？」

意味がよくわからなくて視線をさまよわせた朔美は、レジの後ろの貼り紙に気づいて返事を忘れしまった。天の助けだろうか。「従業員募集中・詳細はジルまで」とある。

「ジルつて、だれ」

独り言だったのに目の前の美女が即答した。

「ジルは私よ」

降つて湧いたようなチャンスだ。ためらわなかつたわけではないが、出会いと縁を信じようと思った。ここは広くないけれど、こんなにキラキラしている。きっと大丈夫。貼り紙を指して言った。

「働きたいんです」

ウサギたちがウエーブしている。がんばれがんばれ。両脚を踏みしめ、品定めでもするような女主人の視線に耐える。

突然現れて働くかせてほしいと頼んだ朔美にも、真っ赤な髪にも、ジルはびくりとも動じなかつた。それどころか表に停めたスクーターを指さす。

「あれ、あなたの？」

「はい」

「素敵。クールなデコね」

興味津々な顔で表へ出ていくジルを慌てて追いかけた。

まるでアンティーク品を眺めるようにスクーターを眺める彼女は、美人で色っぽいのに鋭さもあって、自分のデコよりクールだと朔美は思った。金茶色の髪は染めているのだろうか、うねるほどの量を大きな花柄のシユシユでうなじにまとめていた。シンプルなクリーム色のTシャツとレースのついたくるぶし丈のレギンス、その上にアクセントのかフェエプロンという格好も、メリハリのあるスタイルによく似合っている。

「自分でやつたの？」

スクーターのデコのことだらう。うなづくとジルはにこつと笑つて店内へ戻つていく。

「センスいいわ。アクセサリーとか興味ある？ 細かい作業は？」

またうなづく。細かい作業が好きじやなきやデコるのはできない。

「アンティーク雑貨については？」

「知識はないんですけど、古いものも好きです。和洋問わず」

これも本当だつた。駄目なのは暗いところ、狭いところ。昔に比べたらずいぶんマシになつたけれど。

「ジルボックス」は間口は狭いが奥行きがあつて、いわゆるうなぎの寝床だ。^{どまつ}土間がまつ

すぐ裏まで走っていて、開放感があるとまでは言えないが閉塞感がない。置かれている
雜貨小物は見るだけでわくわくしてくる。
「昼間の店番が欲しいのよ。届け物も時々。スクーターならうつてつけ」

「やらせてください」

「よろしくね」

即断即決、彼女の占い師みたいな潔さには呆然としたけど、嬉しかったしありがた
かった。

「どこから来たの」

「田舎です」

「どこに住んでるの？」

少したじろいで朔美はうつむく。

「まだ決めてなくて」

「ここはどう？」

慌てて見れば、ジルは上を指さしていた。

「広くないけど、部屋が一つ空いてるわ。私の隣」

「ほんとに？ いいんですか？」

思い切り食いついた朔美にジルはにこやかに言った。

「ようこそ、大福商店街へ」

店主のジルことジルママの声は今も朔美の耳に焼き付いている。彼女に会えて幸運
だった。
あれから半年。年を越して季節は真冬だ。

「ジルボックス」はアンティーク雑貨やアクリヤリのリサイクルの店だ。朔美の仕事
はリサイクル品の買い取りと修復、値付けと店番だ。アンティーク雑貨はジルママでな
ければ扱えない。知識や経験が必要だからだ。だが彼女は夜に別の店で働いているので、
慣れてくるにつれて昼間の店はほぼ朔美に任せきりになつた。アンティーク雑貨を持ち
こまれた時だけ店に出てくる。

任されるのは緊張するし、力不足も痛感しているが、信頼されているのだと思うと嬉
しい。勤めてからずっと店は朔美にとって心安らぐ場所で、品物を見ていれば幸せだった。
なのに今日はなぜか目が滑る。落ち着かない。朝、起きた時から同じ男の顔しか浮か
んでこない。

昨日出会ったばかりなのに、夢にまで出てきた人。

考えてみればあの場面で怪しがられるのは朔美の方だったろう。なのに声をかけ、暗

い中、話を聞いてくれた上に道路に這いつくばって、捜し物を手伝ってくれた。朔美がどれほど闇を恐れているか知りもしないのに。

おざなりの礼しか言わなかつたのを後悔していた。暗いところから逃げたかったのもあるが、彼の物言いに不安を覚えたからでもあつた。

でもイケメンだつたし。

惜しいことしたかも？

今朝起きてから、そんな考えが頭の中をぐるぐる回り続けている。

「あーもう、いい加減にしなきや」

自分で自分を叱った朔美は、配達の残りを済ませようと思つた。包装してある品物をレジの棚から取る。朔美の愛車は敷居を跨ぐようにして置いてあつた。せつかくだからスクーターを店の前に置けばと勧めたのはママだ。

「目立つから人寄せにもなるしね」

にんまりと笑つた店主の思惑はびたり的中、朔美のデコスクは今や店の看板代わりだ。宣伝に一役買えたと思うと愛車がさらに誇らしくなる。

真つ赤なボディがやたらとキラキラしているのは全體がラインストーンでデコつてあるからだ。

リア回りはテールランプまでラインストーンが連なつてゐるし、メーターリ回りも同じ

だ。グリップエンドやバックミラーにまであしらつてある。デコトラは認知されて久しいが、デコスクーターはまだまだ珍しいだろう。

昨夜、イケメンがこれを見て驚いたのも無理はない。ライトを向けたデコスクのキラキラ具合はネオンサイン並みだ。暗い場所でなかつたらもつと自慢したのに。

やだ、また彼のことを考えてる。

ブンと振り切るように頭を振つた。引き戸の外へデコスクを押し出し、戸締まりをして『配達中』の札をかけた。かぶつたヘルメットにも、つむじのようないいとこで渦をうずデコつてある。昨日無くしかけた鍵を握りしめ、ゆっくりデコスクを発進させた。上から下までネオンサインみたいな朔美の姿は商店街ではすっかりなじみだが、やつて來た買い物客は振り返る。

「サクミー」

いかにも外人っぽいイントネーションの呼びかけは、初めて商店街に來た日も声をかけてきた二人組の男たちからだ。ジエリーとニックという名前しか知らず、いまだに声をかけ合うだけの知り合い。かたや金髪三つ編み、かたやスキンヘッドという外国人コンビは朔美のデコスクに負けず劣らず目立つ。人懐っこいのは金髪三つ編みのジエリーの方だ。

「チャオ」

挨拶付きの笑顔に手を振るのもいつものこと。それ以上近づいてこない距離感が、逆に心地よかつた。彼らも同じだろうと勝手に思つてゐる。

ならどうして、昨日の彼のことはそう思えないんだろう。

理屈に合わない自分の気持ちに焦れながら、商店街の出口で朔美はデコスクのスピードを上げた。

4

届け先は八階建てマンションの七階だった。狭いところも暗いところも嫌いだけれど。「高いビルも好きじゃないわよ」

階段室の細長い壁に跳ね返る自分の声を聞きながら、朔美はひたすら上を目指した。七階くらいならエレベーターに乗らなくともと思つたけれど、ブーツの足下がよろける。しんどい。ウサギも転げて落ちていきそうだ。

非常階段はどこも似ている。上を見ても下を見ても同じ景色。幾重にも巻いた紙の端を引っ張つたみたいに縦に長い。無機質で単調で押しつぶされそうになるが、エレベーターに乘らないなら自分の足で上るしかない。息が切れるのが情けない。

なんとかたどり着いた七階でドアを開けて階段室を出ると、通路には誰もいなかつた。いや？

濃茶のスチールドアが互い違いに並ぶ両壁の、右側の真ん中に男が一人。朔美に背を向けてしゃがみ込んでいた。見るからに怪しい。

住人なら鍵を開けて入ればいいし、郵便とか宅配ならインター^{ホン}を押せばいい。電気やガスのメーターチェックならドアに貼り付く必要はない。だいたい、ジーンズにジャケットという格好はそのどの職業にも当てはまらない。朔美の視線が強すぎたのか男がこつちを振り向いた。

息が止まつたのは見覚えがありすぎたから。

濃い眉は少し左が短い。眉間にから延びた鼻筋は高く、たっぷりとした大きな口へ繋がつていてる。

昨日会つたイケメンだ。^{ゆうべ}昨夜夢にも見た。

驚きと期待が喉の奥でせめぎ合つて声が出ない。朔美に幸せな恋の思い出は少ないが、まだ恋への憧れも失つていない。心に住まうウサギたちが長い耳をピクピクさせる一方で、彼も朔美の姿に大きく目を見開いていた。唇が動く。

「一一九」

「頭が燃えさかつてゐる。昨夜は暗くて気づかなかつた。消防車呼ばないと」

むつとした。

悪かつたわね。そりやあ赤いけど。真つ赤だけど、失礼でしょ。

初めて会つた人には必ず言われる。今更なのにとっても腹立たしい。腹立たしくてがつかりする。こんな人を夢にまで見た自分が、会いたいと思つてた自分がバカみたいだ。

「消せるもんですか。火傷するわよ放つといて」
「んと肩をそびやかせ通り過ぎた時、男が尖った金物の道具を持つてゐるのに気づいた。忘れていた疑いが立ち返つてくる。

この人、何者なの。

ここで何やつてるの？

廊下の突きあたり、エレベーター手前の左ドアがお届け先だ。常連さんだからよく知つてゐる。インターホンを押したけど返事がない。

もう一度。後ろから貼りつくような視線を感じる。気になつて振り返ると、男がこつちをじろじろと見つめている。

「ここに何の用だ」

込められた非難の色にカッとした。つかつかと近寄つて言い返す。

「どういう意味よ」

「宅配にも郵便屋にも見えない」

「だから何なの」

「考えてみれば昨日も、人気のない時間、人気のない場所に居たな」

お互い様でしょとムカムカする。

どうして私が疑われなきやならないのよ。

「非常階段つてのも怪しいよな」

「怪しいのはそっちでしよう。そこで何やつてるの。空き巣とか」

「は？」

「その道具よ、まるでピッキングじゃないの。……まさか本物？」

ごまかそうとしてる？ ほんとに空き巣？ 一一〇番！

すばやく取り出した携帯を、すばやく奪われて朔美は目をぱちくりさせる。嘘。

しかし奪い取つた方も携帯を見て目をぱちくりさせてゐる。

「なんだこれ」

「ちょっと、返して！」

「携帯かほんとに？ テカテカチカチカピカピカ。昨日見たスクーターそつくり」

「返してってば！」

確かに目一杯デコつてゐるけど、私の携帯なんだから私の勝手じゃないの。

背の高い男が頭にくるのはこういう時だ。必死で携帯を取り戻そうとする朔美を、相手は涼しい顔でひらひらかわす。余計に腹立たしい。どうしてくれよう。

「返しなさいよ！」

「うわっ」

つかみかかった勢いで折り重なって倒れ込んだ。それでもなんとか携帯を奪い取る。「勝った」

子どもじみているのは承知で、取り戻した携帯を高く掲げる。そこでチーンと音がしてエレベーターが開いた。降りてきた老人が立ち止まる。

「えらい勇ましい格好だな、嬢ちゃん」

男の腹に馬乗りになつている自分によく気づいた。

スカートの下にレギンスをはいて正解だ。携帯を掲げ勝ちどきを上げた姿は勇ましいというよりバカみたいだろう。下から冷静な声がする。

「いつになつたら降りるんだ？ 乗つかつていたいなら場所を教えてくれ」

頬が赤くなつた。

マンションの廊下で女に馬乗りされているのに、見上げてくる男は余裕たっぷりだ。

憎たらしい。体を支える手のひらから伝わつてくる筋肉の感触にドキドキする。

「じょ、冗談じゃないわよっ」

身を起こそうとする男から朔美は慌てて降りた。老人は一人におかまいなしで、さつきまで男が貼りついていたドアに近づき、鍵穴をのぞきこんでいる。

「直つたのか」

「どこもおかしくないですよ、スゲさん」

立ち上がった男が苦笑いで言うが、鍵を取り出して開け閉めを確かめる老人の返事は

いい加減だ。

「ふむ、直つとる。修理代は」

「修理してませんって」

「ばかもん。商売は商売じゃ。ほれ

すでに用意していたらしく、老人が懐からぽち袋を取り出した。手を出さない男に促す。

「見舞いだ。メロンでも饅頭まんとうでもわしからだと買っていけ」

「……ありがとうございます」

しぶしぶ男が受け取ると、それで終わりとばかりに老人は部屋へ入つてしまつた。

二人で廊下に取り残され、朔美は彼を見る。修理代ってことは。

「錠前屋じょうまえやだよ。開けづらいから見てくれって頼まれたんだ」

ご丁寧に解説しながら床の上の道具を片づけると、男は広い歩幅でエレベーターに近づきボタンを押した。気まずいつたらない。

「最初からそう言えればいいでしょ」

さつさと帰ろう。そろりそろり相手と距離を置き、非常階段へと後ずさる朔美を、男が再び呼び止めた。

「どこへ行く」

「お届け先が留守だから」

「宅配便なもんか」

「買っていただいた品物をお届けに来たんです」

腹は立つても、空き巣と間違えて通報しそうになつたのだからと、我慢して説明した。相手はまだ疑わしげだ。その間にいつたん下まで降りたエレベーターがまた上がつてきで開く。スタッタと乗り込んだ男に顎あごあごで促された。朔美は首を振る。

「荷物はひとつだけに見えるが」

他に届け物は無いんだろうと言いたいらしい。

「そう、だけど」

「非常階段でどつかに行くわけ」

降りるならエレベーターの方が速い。それでもエレベーターに乗らない理由を、見知らぬ人に言いたくない。この男にはなおさらだ。仕方なく覚悟を決めて朔美はエレベーターに乗つた。

七階からなら大したことない。大丈夫と自分に言い聞かせる。

男が入り口脇の操作パネル前にいたので、反対側の入り口脇に陣取つた。古いビルのせいか、片側でしか操作できないのが心細い。

すうつと落下感覚に襲われるのと同時に、煙のようにおびえが忍び込んできた。こういう時の一秒は、一分にも一時間にも感じるものだ。突然黙り込んだ朔美はさぞや奇異に見えるだろうが、そんなことはどうでもいい。あと何秒？

ガクンとエレベーターが止まつて朔美の心臓も止まつた。照明が補助灯に切り替わる。

「な、何。どうしたの」

「さあ」

男の声には慌てた様子もない。操作パネルの緊急連絡ボタンを押しているが応答がない。

朔美の中でおびえがパニックへと変わり始める。
「どうして誰も答えないの」

声が甲高くなる。叫び出しそうだ。男はじろつと朔美を見たが、何を思ったのか改め見直してきた。壁にすがりついた手が震えているのがばれたかもしれない。

この町に来てからは本物のパニックに陥つたことはないのに。膝から力が抜ける。壁を背にしてずるずるとしゃがみこむ。

「……早く動いて」

『もしもし、管理人です。誰かいますか』

突然、操作パネルから声が聞こえた。

飛び上がった朔美は男の横に取りついたが、男はやっぱり平静だ。

『頼むよ、急に止まつちやつて』

『今、電気系統の点検をやつてたはずなんですが』

「お願い、助けて」

か細い朔美の声は届いていないが、代わりに男が念押しした。

『事故や故障でないなら急いでくれ。女性もいるんだが具合が悪そうだ』

『わかりました。すぐに』

経験から言えば「すぐ」は数分から十数分ということ。そう考えないと実際そうだった時に耐えられない。

しつかりしなさい。連絡もついた。故障でも停電でも地震でもないなら本当にすぐだ。携帯もホイツスルも、非常食の飴だって持つてる。大丈夫。

わかっているのに震えが止まらない。操作パネルに額を押しつける。

落ち着け。落ち着け。

言い聞かせなければならない自分の弱さが、どうしようもない心が、嫌でしようがな

かつた。ずいぶんマシになつたし、対処の仕方も覚えたけれど。どうしてこんなに弱いんだろう。

他の人だつたら、一人じやないことを思い出してちらりと横を見ると、壁によりかかった男は腕組みしていた。

平静な態度はいつもなら怒りをかきたてられそうなものだが、今は羨ましいだけだ。この人は大きくて強くてしつかりしている。怖いものなんかないのかもしれない。自分とは正反対だという事実が朔美の心を刺した。

わずかな時間も耐えられない自分とは正反対。ふわっとエレベーターが動き出して心臓がまた跳ねた。数秒でゆるやかに着地しき慣れた電子レンジみたいな音がする。

「大丈夫ですか！」

管理人らしき人と作業服を着た二人が大きな声をかけながらのぞき込んだ。

「ああ」

淡々とした彼の声で朔美は我に返つた。

戸が開いてる。
エレベーターが、直つた？

人を押し退けるようにして駆け出した。エレベーターホールからロビーを抜けて外まで一気に。

日射しの下まで出てやつと立ち止まる。明るい。広い。膝に手を突く。必死で息を継ぐしかできない。キリキリと冷えた空気が窒息しそうだった肺に解放感を流し込んでくる。

「昨日も不思議だつたんだ。單なる捜し物にしちゃ切羽詰まつて見えて。あんた、暗いのが駄目なんだな」

肩越しに振り返つたら男がいた。追いかけてきたのか。どうして。

冷静な声と顔を見ているうちに、なんとか抑え込んでいたパニックの反動が襲つてきた。安堵と怒りと悔しさがごちゃごちゃになる。もう堪へるつもりもなかった。

「そうよ駄目よ。暗いのも、狭いのも。だから息が切れても階段を上つてきたんじゃないの。だから乗りたくないなかつたのに」

だん、と足を鳴らす。地団太を踏む子どもみたいだと思つても止められない。

「乗りたくなかつたのに、あなたが乗せたんじゃないの。おまけに止まるなんて最悪よ。情けないつたらありやしない。そう思うでしょ。思つてるんでしょ」

「落ち着け」

「落ち着く？ わかりやしないくせに。これでも必死で慣れてきたのよ？ もつとひど

かつたんだから。それでも駄目なものは駄目だし、私がエレベーターに乗らないからつて、あなたに迷惑がかかるわけじゃないでしょ。なんで無理矢理乗せられてこんな思いしなきやならないのよ！」

最後は獣のように吠えていた。堪えに堪えていた涙があふれ出した。情けなさが零になつてぼつりぼつりとアスファルトに落ちる。

相手の丸い目はまさしく、豆鉄砲を食らつた鳩みたいだつた。それも自分の弱さのせいだと思うと涙はさらに勢いを増す。朔美は下を向いた。頬に北風が冷たい。ふいに風を感じなくなつた。頬だけじゃない、身体全体が大きくて温かな壁に包まれている。

耳元で声がした。

「悪かった」

一言の謝罪は朔美の心の堰を切つた。ひび割れから漏れていた涙はどつと流れ出して嗚咽になり、彼にしがみついて泣くことしかできなかつた。わんわんと、ひんひんと、辺りもはばからず。

その間、朔美を抱きしめた彼は、小さな子どもをあやすように慰めるように、意味のない言葉をささやき続けていた。

立ち読みサンプルはここまで

商店街に移り住んで半年経つと、知らぬ間に店一軒一軒についての知識が蓄えられる。たとえば、レストランで一番人気があるのは洋食屋の「おいし」だ。二代目が突然亡くなつたため、三代目の息子が若くして後を継いだ。幼なじみのお嫁さんと一緒に守つている店はランチは気軽に、夜は少し気取つた美味しい洋食が食べられる評判だ。

朔美も行つてみたいと思つていたが、「ジルボックス」の店番をしなければならないし、午後は配達で留守にすることも多いので、お昼は近所で買ってきて店で食べることになる。なら夜はというと、雰囲気を大事にするレストランは店内が薄暗いことが多い。そういう店に行く勇気はまだなかつた。

朔美が夜、入るとしたら明るくて広いことが絶対条件だ。

ファミレスの「ベリーズ」みたいな。

エレベーターから解放された後、恐怖と緊張の反動で泣きわめいた朔美を、感情が静

まるまで男は黙つて抱きしめていてくれた。

「大丈夫か？」

恥ずかしさもあつて顔が上げられない。ぐすぐすと鼻を鳴らす。
「悪かったな、無理に乗せて」

謝られるなんて思わなかつた。子どもじみた行動が余計に恥ずかしくてもそもそも首を振る。

両肩をつかむようにして身体をひきはがされ、急に寒さを覚える。のぞきこんできただ

男はじつと朔美を見て、目だけ和ませた。

「泣きやんだな。仕事中なんだろ」

声が嗄れでいるのでこくこくうなづくと、返された言葉は思いがけないものだつた。
「晩ご飯、一緒に食べないか。お詫びに奢る」

今度は驚きで声が出ない。
「パチパチと囁きを繰り返して、理解が追いつく時間を稼ぐ。
「どこがいい」

「ど、こ、って」

「うまいところなら『おいし』とか」

「『ベリーズ』！」